中君は入黨の時から、三百萬圓云々の評判を立てられ、政黨がこの頃から派手となり、同時に金臭くなつた。何事にも金の問題を伴ふやうになつたのが、信用失墜の一因である。

田中君の就任後、間もなく革新倶樂部が、犬養君以下多數入黨して來たが、犬養君の兩翼たる古島、秋田兩君中古島君は議員を辭職し、秋田君は入黨早々、黨内で時を得顔に活動したりして居つた。

板垣伯を黨祖として伊藤、西園寺二代の總裁に指導、陶冶された政友會の氣品も、かやうな事が重なり、時代の惡風潮に蝕まれて、暗い影がさして來た。犬養君は革新倶樂部と共に、政友會に流れこむ時「金が無くては政治は出來ぬ」と悲痛な獨り言を言つてゐた。その犬養君が大政友會の總裁となり、帝國の首相となつたのだ。後世の史家がこれを何と評するか知らぬが、憲政の神とまで人氣を博した犬養君にこの言葉があり、その大養君で政黨時代が一段落を告げたのも、何かの因緣と感ぜられる。

政治家も惡いが、財界の人々にも責任がある。官僚全盛の時代は其門に集り、政黨有力となると見ると、忽ち黨人の御機嫌を取結び、手段を盡してこれと結んで利用にかゝつた。既に金の必要を感じてゐる政治家は、又これと結ぶ事が重寶だから、その誘惑に乘りさうな事である。こゝに一つ面白い話がある。犬養君が首相となつた時、偶然その官邸で犬養と百年の知己のやうに話す或る實業家に會つたが、何ぞ知らん、その實業家は從來自分と政界の人物を批評する度に犬養君を惡口してゐた男であつた。翻手作雲覆手雨、すべてこれ權力と金力の交易のためである。國民が愛想を盡かし、軍人が憤るのも無理はない、と云はねばならぬ。國民に愛想を盡かされた主なる原因は、政民兩黨の源平式政爭で、下劣な地方人事を見せつけ、嘔吐を催させたためである。又軍人を憤慨させた直接原因は、昭和六年春の豫算總會に於ける出來事であらうと思ふ。當時滿洲に於いて矢は既に弦上にあり、一髮千鈞の危機が迫つて居つたに拘らず、議會は幣原外相虐めに沒頭し、遂に議會内で殺人强盜に會つたとの告訴沙汰まで起り、我々さへこれを苦々しく見兼ねた程であつた。異常な緊張の中に國策を練つて居つた軍部が、激怒したのも無理とは思へない。

現在の政黨が、その信用を回復せんとするには、政策問題又は政權問題もさる事ながら、まづもつて自らを淨め、過去に顧て、總てを清算し、國家の重きに任ずべく、政治家本來の識見、操

守、氣品に覺醒しなければならぬ。よろしく古人に學ぶべきである。

近時の世態から、憲政の前途を悲觀する議論が、往々にして行はれてゐるやうであるが、これは實に日本の國民性を知らざる以つての外の謬論と言はねばならぬ。第一回選擧に示した熱烈な意氣と純眞な精神こそは、日本國民の立憲的議會政治に對する眞の姿である。政黨も、國民も、今日に處する途は、よろしく相率ゐ、相警しめて、この第一回選擧の精神に還るにある。

「憲政回顧錄」　定價金參拾錢

昭和十年十一月二十九日　印刷
昭和十年十一月三十日　發行

著者　岡崎邦輔

發行者　東京市杉並區馬橋町四ノ五三五　荒卷昌吉

印刷者　東京市京橋區八丁堀四丁目五番地　合名會社　不二印刷社　小西嘉三郎

發行所　東京市京橋區銀座西七丁目電通ビル　福岡日日新聞社東京聯絡部